

# 子規宅で鷗外と邂逅

## 文人の 武蔵野

俳人としての夏目漱石は、生涯に一回だけ「武蔵野」を俳句にしました。漱石は、いっしょで「武蔵野」を詠んだのでしようか。親友だった正岡子規に送った書簡に付された1896年(明治29年)1月28日という日付を手がかりにして考えてみたいと思います。

前年の95年(明治28年)は、後に漱石が「坊っちゃん」の舞台とする松山(愛媛県)に

## 夏目漱石 ②



台東区根岸の「子規庵」。1896年の新年の句会では、奥の6畳間に子規が伏せ、手前の8畳間に鷗外や漱石が集ったという(新型コロナウイルスの影響で、現在は休館中)

英語教師として赴任した年でもありました。松山は正岡子規の故郷でもありました。5月、日清戦争に従軍していた子規が略血のため帰国。神戸の病院に入院しているとの報を受けた漱石は、すぐに松山から返信します。8月、帰郷した子規は、漱石宅に同居を始めます。

まもなく子規を中心とする句会が始まります。漱石も参加し、熱心に句稿を子規に見せるようになります。「名月や故郷遠き影法師」などの作品が地元の新報に掲載されます。12月、「東京より貰う」お見合い相手を写真で運び、27日に帰京、28日に婚約します。当時「結婚、放蕩、読書三者其一を択むにあらざれば大抵の人は田舎に辛防は出来ぬ」と子規に打ち明けていた漱石ですが、結婚、俳句、読

書を手に入れたのでした。

翌96年1月3日、漱石は帰京中の子規宅(根岸)で開かれた新年の句会で森鷗外と初の邂逅を果たし、14句を残します。4日後の7日には松山に戻り、28日には「武蔵野を横に降る也冬の雨」を含む40句を子規に送ります。

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

### おすすめの1冊

## 「坊っちゃん」

「人間は竹のように真直でなくっちゃ頼もしくない」と信じて突き進む「坊っちゃん」。一人称小説ですので、坊ちゃん自身が回想する武勇伝の真実性を疑うこともできるのですが、まずは「真直」に読み、あらためて「正義」について考えてみたいと思う今日この頃です。



(岩波書店提供)